

祈禱や御祓大麻等を献上し、また御代参使の参拝・宿泊施設の提供等にも対応した皇室の御師といえるのではないか。

近世期における西京神人の変化

吉野亨

本発表では、北野社に属した西京神人が、北野社の神役奉仕とは別に行っていた宗教活動に着目した。

そもそも西京神人は、中世より北野社に属した神人である。

『北野天満宮史料 古文書』『北野天満宮史料 古記録』などによれば、神役—御供調進・北野祭の神輿渡御における鉢供出等を負担していた。その一方、麴の販売特權—税の免除と独占売買—を有しており、この麴販売の利益を神役負担に充てていたとされる。また『北野誌』によれば西京に七つの寺院—七保と呼ばれる—を持ち、神供所として運営していたとされる。この西京神人について、網野善彦・小野晃嗣らにより、麴座神人としての側面に焦点が当てられ研究が進められてきた。また近年、三枝暁子により西京神人の近世初頭の実像—神職化する神人—に焦点をあてられ、研究が進められている。

一昨年、本大会にて近世期における西京神人と瑞饋祭の展開について考察を行った。その際、瑞饋祭の展開—瑞饋神輿の発展—と西京神人の近世における祭祀行為の展開が期を一にすることを指摘した。今回の発表では、瑞饋祭以外に西京神人がどのような活動を行っていたのか、文安元年（一四四四）文安の

騒動以降の西京神人の宗教活動に焦点を当て考察を試みた。

最初の変化は、慶長四年（一五九九）に西京神人が北野社へ補任の要請を行い始めることがある。中世では西京神人が補任を要請した記録は見受けられない。中世では宮仕や大工職などに対して補任状が発行されていることが『北野天満宮史料』から窺える。しかし、中世の記録を見る限り西京神人に対する補任はなかつた。この補任の要請はしばらく期間を置き、元禄二年（一六八九）に再び行われ、これ以降恒常化する。近世期、西京神人は補任を行うことで身分を確定するようになら化していったのである。

補任が認められた元禄の頃から、西京神人は北野社の神事に参加、奉幣を行う様になる。『北野天満宮史料 宮仕記録』によれば二月二十五日の神事にて神人達が奉幣を行つて記事が散見している。また北野社神事に参加するだけでなく、独自に祭礼を行う様になる。『北野天満宮史料 宮仕記録』によれば、「御旅所」において神人達が御供を供え神事を行い、西京一帯で御輿を担ぎ、鉢や曳山を出す祭礼を行つて記事が見受けられるようになる。

祭礼を行う以外にも独自に札配りと略縁起の頒布を行つ始めた。札配りは、元禄十二年（一六九九）に北野社に対して許可を得ようとしているが断られ、その後は独自に「天満宮守護所」と記した札に祓串を添え頒布するようなる。北野社はこの札の頒布を差し止めるが、以後神人が札配りをしていることが『北野天満宮史料 宮仕記録』に散見する。

一方、札以外にも『安樂寺安置天満宮御自作御神像并靈寶略

御傳記』なる縁起が刷られ、頒布されていた。この縁起は、西京にある安樂寺の縁起がしるされた刷り物で、現在三部が確認されている。実際にどのように頒布されていたのかは不明であるが、これは一種の寄付を集めるコマーシャルとして頒布されたものと推察される。

以上のように、西京神人は北野社と新たに関係を補任と云う形で切り結び神人職を得つつも自ら「社家」「社人」と名乗り、七保の寺院を運営し、西京や「御旅所」で祭礼や神事を展開する祀り手として独自に活動を行う。つまり、神人達の宗教活動の意味とは、自ら古い神人像からの脱却を図つていく意味があつたと推察されるのである。

山崎闇斎の「神」概念について

孫 傳 玲

周知のことく、山崎闇斎（一六一八—一六八二）は、近世日本思想史上における代表的人物である。彼は朱子の思想を正確に日本に広めることに努めた、日本の朱子学の成立期を代表する朱子学者の一人である。また同時に、彼は神道についても深い研鑽があり、垂加神道という日本の神道史・宗教史に影響の深い一派まで開いた神道家でもある。

本発表では、山崎闇斎の「神」概念を取り上げて検討する。

無論、「神」とはなにかという問題は、神道を説く上で、肝心の問題であり、特に中世後期に朱子学が日本に移入するにつれ

て、神道の理論化・合理化を重視する神道諸派（例えば、吉田神道、伊勢神道など）にとって、「神」をいかに論理的かつ合理的に解釈するかは、切実な問題となる。一方、朱子学においても「神」や「鬼神」、「魂魄」などの概念が「理」「氣」や「陰陽五行」との関連で論じられている。そのため、「神」は神道と朱子学の共通概念（神に対する理解はそれぞれ異なるかもしれないが、少なくとも言葉としての「神」は共通するのである）となる。このように、「神」を如何に理解すべきかは、神儒兼学の闇斎にとって、言うまでもなく重要な問題となるわけである。下川玲子が指摘するように、「闇斎において、「神」は、彼の朱子学と神道思想のリンクのいわば留め金に位置する概念と言える」（「山崎闇斎の「神」概念」、『愛知学院大学文学部紀要』三十五、二〇〇五年、三九四頁）。

神とはなにかについて、闇斎が五十五歳の時（寛文十二年、一六七二）に書いた「会津神社志序」において、「蓋天地之間唯理與氣、而神也者理之乘氣而出入者」（日本古典学会編『新編山崎闇斎全集』第一巻、七九頁）と述べている。ここで闇斎は、「神」を「理之乘氣而出入者」と解釈している。この解釈について、高島元洋は、「神=理=実体」という図式で闇斎の「神」概念を理解し、朱子学における形而上の「理」が闇斎においては実体化されて「神」に重ね合わされていると指摘した（『山崎闇斎——日本朱子学と垂加神道』ぺりかん社、一九九二年）。これに対して、下川玲子は、闇斎がやはり「理」=形而上、「氣」=実体であり「神」はすなわち「氣」であるという通常の朱子学の基本を踏襲していると述べ、高島説を批判した